がひょっこりたずねてきて、

「五郎ちゃん、面川沢は今がちょうどきのこや栗のさかり、とまりがけでとりにきらんしょ。」

とさそいました。こんな急な話を、母や祖母が許すはずがないと思ったのに、意外にも、

「藩校も休みになったことだし、五郎、おばさまと行っておいで。」

と母は言いました。これが永久の別れになるとは知らずに、五郎はさそわれるままに、いそいそと家をあとにしました。祖母、母、姉、それに七歳の妹までが、これがこの世の別れとなることを知っていて、門の外まで見送りに出たとは、五郎にとって思いもよらぬことでした。母たちは、この日のことをひそかに相談して、せめて五郎一人は柴家のあととりに残すために、きさおばをわざわざ呼んで、安全な面川沢村に行かせたのでした。